

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第15号 (2003年4月1日発行)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001946

国語研の窓

15号

平成15年4月1日 第15号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会

〒115-8620 東京都北区西が丘 3-9-14
電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530
URL <http://www.kokken.go.jp/>



もくじ

- 暮らしに生きることば 1
- 研究室から：『分類語彙表』増補改訂版について 2
- ことば・社会・世界：「電子政府」を支える漢字研究 5
- ことばQ&A 6
- 新刊 6
- 「ことばビデオ」シリーズ 6
- コラム 7
- 新「ことば」シリーズ16 7
- 第15回「ことば」フォーラムのお知らせ 8

暮らしに 生きる ことば

草木の名前

樹は下から見上げるときの美しい。葉叢を透かして空を見る。

国語研究所は、北区と板橋区の境にあって、構内には37種、約300本の樹木が息づいています。それぞれの木はそれぞれの木洩れ空を抱えています。

そのなかに楷ノ木があります。中国の原産で日本には自生しないウルシ科の落葉高木です。孔子の墓に弟子の子貢が手ずから植えたと言われ、孔子木とも学問の木とも呼ばれているものです。若木のうちは地中をほう根から伸びる小幹が、直立して生え並ぶためか、漢字書体の楷書の語源となった木です。国内には少なくとも149カ所あるうちの1本で、湯島聖堂の大樹の種子から育ち、中国山東省曲阜の孔子廟に植えられたものの子孫にあたるようです。

ここでは春、真っ先に目立たず花をつけるのは、スズメノカタビラです。草の中で一番多い鳥の名がスズメで、小さいものの代名詞です。イネ科のため、

極小の花が合わさって小穂を作り、集まって稲穂のように見えます。細かな穂の一つ一つを、襟元をあわせてたつましいひとえの着物に見立てたわけです。

春の盛りはタンポポです。好きなのは子供の遊び説です。茎を5ミリ位にちぎり、両端に切れ目を入れて5分位、水につけます。放射状に固く反って小さな鼓になります。鼓はたん、ぼんぼんと聞こえるので、言いやすくタンポポになったという説です。

夏には生け垣にヘクソカズラが咲きます。可憐な花ですが、葉や茎に良いとは言えない匂いがあるため、万葉の時代から気の毒な名で呼ばれています。不憫に思い花の形を早乙女の笠と見立て、早乙女花と呼びかえた人もいたようですが、あまりの落差からこの名は広まっていません。そこで、これまでのいきさつと実情とを踏まえ、次のように名付けてみました。美人のおなら草。

言葉の由来を訪ね、自分の言葉も創ってみることは楽しいことはありません。昔の人の心に出会い、言葉を創った時の気持ちを、今度は遠い未来の人が、訪ねてくれるかも知れないからです。(近藤 二郎)

『分類語彙表』増補改訂版について

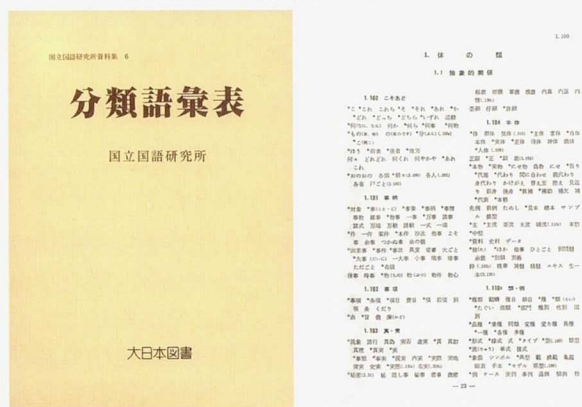
●『分類語彙表』とは

『分類語彙表』は1964年（昭和39年）に国立国語研究所資料集として刊行された日本語のシソーラス（類義語集）です。

刊行当初から、国語の研究だけでなく言葉に関心を持つ人たちに幅広く利用されてきましたが、刊行から時間が経つにつれ、現代語とのずれが生じるようになり、内容を新しくしてほしいという声が高まってきました。また、コンピューターによる言語処理への応用などを考えると、収録語数をもっと増やす必要も出てきました。

このような要望に応えるため、国語研究所ではこれまで試行的に言葉の追加作業を進めてきましたが、このたび一定の増補改訂が完了したのをうけて、報告書として刊行することにしました。

『分類語彙表』初版（現在では絶版）



●「シソーラス」とは

通常の国語辞典は、言葉を五十音順に配列して意味を説明するという形をとっていますが、実は五十音順の配列というのは、たくさんの言葉を探しやすくするための便宜的な手段に過ぎません。

言葉の重要な役割は、「意味」の伝達です。したがって、意味を基にして似た意味の言葉を集めてそれを配列するという方法が言葉の実態から考えると自然な姿といえます。日本でも、意味分類による辞書のほうがイロハ順のような発音から引く辞書よりも古くからありました。

しかし、意味にははっきりした境界線が引きにくいいため、客観的な分類が困難です。また、意味には

原則として特定の順序が存在しないので、意味を基準にして言葉を集めて配列するには、なんらかの工夫が必要になってきます。例えば、ひとつの言葉のグループの中にさらに小グループを作るとか、関連する言葉のグループを相互に参照できるようにするなどです。そのような工夫がなされた言葉の意味分類が「シソーラス」です。

シソーラスは、似た意味の言葉を集めるということが主眼なので、意味の説明は必ずしも必要ではありません。見方を変えれば、言葉の分類そのものが意味の説明になっているともいえます。『分類語彙表』では、意味の説明は省いています。

●分類のしくみ

『分類語彙表』は、数字を利用した構造的な分類体系をとっています。

例えば、「情報」という語は、「1.3123」という分類番号を持つ<伝達・報知>という分類項目に置かれています。

この「1.3123」という分類番号は、次に示すような構造を持っています。

図1 分類番号の構造



まず、最初の1けたは、品詞分類に相当します。

- 1 名詞の仲間—体の類
- 2 動詞の仲間—用の類
- 3 形容詞・形容動詞・副詞等の仲間—相の類
- 4 その他の仲間（接続詞・感動詞など）

『分類語彙表』の特徴のひとつに意味的な分類と文法的な分類を両立させた点があげられます。文法的な分類の代表である品詞のうち重要な役割を果た

すものを選んで、前ページのように4つの「類」に大別しました。

とくに1～3の類は、日本語の文法的特性を考える上の基本的な枠組みで、意味的にはそれぞれ、もの・動き・ありさまという包括的な概念に対応するものです。

次に、分類番号の2けた目（小数点第1けた目）は、「部門」に相当します。「部門」とは、「類」の中を意味的に大きな概念で分けたもので、次の5つの「部門」を立てました。部門は、それぞれの「類」に共通するものですが、意味的な対応が存在しないところもあります。

各類と部門との対応は図2のようになっています。

図2 「類」と「部門」との関係

部 門 \ 類	体	用	相
抽象的關係	1.1	2.1	3.1
人間活動の主体	1.2	—	—
精神および行為	1.3	2.3	3.3
生産物および用具	1.4	—	—
自然物および自然現象	1.5	2.5	3.5

また、今回の増補にあたって「中項目」を設けました。これは、分類番号の2けた目と3けた目を合わせた部分に相当します。「中項目」は、「部門」より小さい概念で、その下の分類項目をまとめる働きをします（図1参照）。

●主な増補改訂の内容

①収録語数

初版の『分類語彙表』は、国語研究所が手掛けた「現代雑誌九十種の用語用字調査」（1956～1964）の結果を基に、学習基本語彙などを追加し、およそ3万3千語を収録していましたが、今回の増補改訂版では、これを約7万9千語（延べでは約9万5千語）に増やしました。これは、小型国語辞典の見出し語の数にほぼ匹敵します。増補にあたっては、日常的に使用される語句を中心に、国語研究所が行った語彙調査の結果なども参考にしました。

②複合語・慣用句

初版の『分類語彙表』は、「現代雑誌九十種の用語用字調査」の結果を基にしたものでしたが、この調査では、語句を短い単位に分割していたので、複合語や慣用句などがあまり収録されていませんでした。

分類項目一覧表

増補改訂版では約900の分類項目を設けました。その一部を以下に紹介します。

1 体の類	2 用の類	3 相の類
【 1.1 抽象的關係 】	【 2.1 抽象的關係 】	【 3.1 抽象的關係 】
1.10 事柄 -----	2.10 真偽 -----	3.10 真偽 -----
1.1000 事柄		
1.1010 こそあど・他	2.1010 こそあど・他	3.1010 こそあど・他
1.1030 真偽・是非	2.1030 真偽・是非	3.1030 真偽・是非
1.1040 本体・代理		3.1040 本体・代理
1.11 類 -----	2.11 類 -----	3.11 類 -----
1.1100 類・例		
1.1101 等級・系列		3.1101 等級・系列
1.1110 關係	2.1110 關係	3.1110 關係
1.1111 本末果	2.1111 本末果	
1.1112 因果	2.1112 因果	3.1112 因果
1.1113 理由・目的・証拠		3.1113 理由・目的・証拠
1.1120 相對	2.1120 相對	3.1120 相對
1.1130 異同・類似	2.1130 異同・類似	3.1130 異同・類似
1.1131 連絡・所屬	2.1131 連絡・所屬	
1.12 存在 -----	2.12 存在 -----	3.12 存在 -----
1.1200 存在	2.1200 存在	3.1200 存在
1.1210 出沒	2.1210 出沒	3.1210 出沒
1.1211 發生・復活	2.1211 發生・復活	
1.1220 成立	2.1220 成立	
		3.1230 必然性
1.1240 保存	2.1240 保存	
1.1250 消滅	2.1250 消滅	
1.1251 除去	2.1251 除去	

< 以下略 >

例えば、「驚く」の類義語として、初版では次のような語があがっていました（8語）。

驚く 驚かす おどかす おどす 驚き入る
たまげる きょっとする はっとする

増補改訂版では、漢語サ変動詞、慣用句、連語などを増補するとともに、語句の組み替えなども行いました。その結果、収録語句は50となり、類義表現の幅が広がりました。

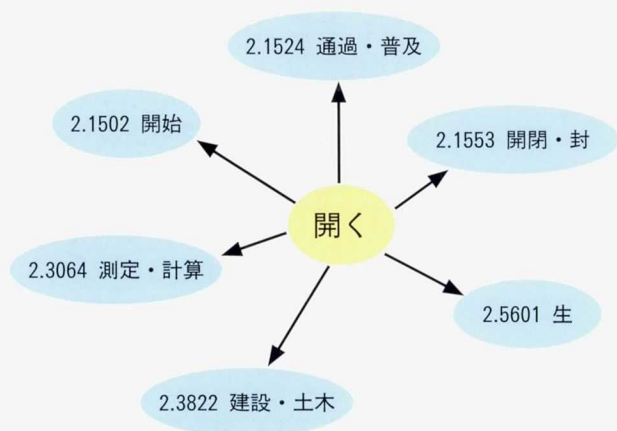
驚く 驚かす 脅(おど)かす 一驚する 驚嘆する
びっくりする と胸をつく 喫驚する 仰天する あっと言わせる
きょっとする きくりとする どっきりする どきりとする どきんとする
はっとする ひやりとする ひやひやする 肝を冷やす 気をのまれる
驚愕する 驚倒する 震駭する 震撼する
驚き入る たまげる おったまげる ぶったまげる
度肝を抜く 度肝を抜かれる 肝を消す 肝をつぶす
肝を奪う 荒肝を抜く 荒肝をひしぐ
動転する 目を白黒させる／を丸くする 目が点になる
腰が抜ける 腰を抜かす
舌を振るう 舌を巻く 息をのむ
目をむく 目の玉／目玉が飛び出る
固唾(かたず)をのむ 手に汗を握る
目を疑う

③多義語

基本語の多くは多義的です。「開(ひら)く」は、<閉じていたものがあく>という基本的な意味のほかに、「店を開く」という場合の<物事を始める>という意味、「原野を開く」場合の<開墾する>など、異なる意味で用いられます。

これらの別々の意味を持つ「開く」は、それぞれ違った分類項目に置かれなければなりません。初版でも多義語の処理は、ある程度は考慮されていましたが、全体としては不十分でした。今回の増補改訂版ではこの点を改良して、同じ言葉を意味に応じてできるだけ何か所にも分類するようにしています。

図3 「開(ひら)く」の多義性を反映した分類



④分類項目の対応

今回の改訂にあたって、できるだけ「体の類」の分類項目と「用の類」の分類項目とが水平的に対応するようにしました。ただし、個々の分類項目の対応については、言葉の意味の性質から、必ずしもうまく対応するとは限らない場合もあります。なお、組み替えは行いましたが、分類の大枠そのものは初版を受け継いでいます。

一例として、「開閉・封」の分類項目の対応を図4に示しました。

図4 分類項目の対応

1.1553 開閉・封		
01 開閉 開け開め 開けたて		
02 開放 全開 半開 開けっ放し 開口[～窓] 開(ひら)き 半ドア		
03 切開		
04 開港 開港 開	2.1553 開閉・封	
開架 閉架	01 開閉する 開け開めする 開けたてする	
開扉 閉扉 開	02 あく(明・開) あける(閉・開) 開(ひら)く	
開園 鎖園	開放する 全開する 半開する	
解錠・開錠 錠	開放する 全開する 半開する	
戸締まり	開放する 全開する 半開する	
05 開め切り 閉鎖	開放する 全開する 半開する	
06 ふさがり 詰ま	開放する 全開する 半開する	
閉塞 梗塞	開放する 全開する 半開する	
07 封 封じ 封じ	03 切り開く 打ち開く 切り広げる 口を切る	
完封 密封 鎖	切り開く 打ち開く 切り広げる 口を切る	
封緘 別封 開	切り開く 打ち開く 切り広げる 口を切る	
08 開封 開札 封	04 開港する 鎖港する 開揚する 開揚する	
未開封	開港する 鎖港する 開揚する 開揚する	
	開園する 鎖園する	
	解錠・開錠する かぎをあける 錠錠する	
	かぎを掛ける	
	戸締まりする 差し面める	
	閉まる 開める 閉じる 閉ざす	
	閉め切る 閉鎖する 密閉する	
	立てる[戸を～・障子を～] 立て切る	
	06 ふさがり 詰まる 詰まる 目詰	
	閉塞 梗塞	
	07 封 封じ 封じ	
	完封 密封 鎖	
	封緘 別封 開	
	08 開封 開札 封	
	未開封	
	3.1553 開閉・封	
	01 開け放った 開かれた オープン	
	ぱっくり	
	02 開かずの 閉じた 閉ざされた クローズ	
	ド-	
	ばたん びしゃり	
	びっちり	

●『分類語彙表』の利用

一般に、シソーラスは文章を書く際に目的とする言葉を見付けるために利用されたり、言語教育において、基本的な語彙を選定するための基礎資料として利用されてきました。

近年では、言語研究における利用が盛んになってきました。語彙の体系的な研究や言語処理の分野においては、不可欠な資料とみなされています。

今回の増補改訂版も、専門的な分野にとどまらず、有益な資料として幅広く活用され、社会生活に役立つことが期待されています。

(山崎 誠・小沼 悦)

「電子政府」を支える漢字研究

●漢字情報を体系化する

国立国語研究所・情報処理学会・日本規格協会は、経済産業省の委託により、2002年9月から共同で「電子政府文字情報データベース」の構築に取り組んでいます。

このデータベースは、総務省や法務省が保有している住民基本台帳・戸籍などの電子化にかかわる文字すべてに対して、読み情報・文字コード番号などの情報を付与し、個々の漢字にどのような異体字があるかを示すもので、その情報は「電子政府文字情報データベースシステム」に登録され、国民全般の使用に供されることになっています。

三者の役割分担は、国立国語研究所が「文字の同定・検証」、情報処理学会が「データベースシステムの構築・試験運営」、日本規格協会が「文字グリフ（字体の骨組みを示す文字図形デジタルデータ）の作成」となっています。

●国立国語研究所の役割

まず、日本規格協会作成の平成明朝体の文字（グリフと呼ばれます）と、総務省・法務省から提供される文字とを照合します。

次に、文部科学省による各種の国語（漢字）施策、経済産業省の文字コード規格、法務省通達、市販の漢和辞典などの内容を調査し、それにもとづき、個々の文字に対して、

- ・部首、画数、読み、何かの異体字かどうか。
- ・常用漢字表にあるか、表外漢字字体表ではどう扱われているか。
- ・国内規格のJISコード（第1～4水準）は何番で、国際規格のUCSコードは何番か。

といった客観的な属性情報を付与して、その情報を体系的に整理します。

さらに、各省庁から提供された原データを元に、一字一字について、「どういう用途で、いかなる語を表すために必要とされているのか」、「ほかの漢字とどのような関係を持つのか」といった点について言語学的な分析を加えます。

●文字情報公開システムのあらまし

このデータベースには最先端の文字検索技術が用いられる予定です。そのシステムの特徴の一部を簡単に紹介しましょう。

(1)検索の簡便性

各地方自治体職員や一般市民等が電子申請などにおいて利用できるように、インターネット等を通じて必要な文字情報が検索できるようにします。その際、漢字に関する専門知識がなくても簡便迅速に目的の文字が検索できるように、たとえば、次のような工夫をおこなっています。

- ・部首や読みの特定が困難な文字について、よく知られた文字を入力し、その文字を分解して取り出した構成部品を検索キーとする「解字検索機能」。
- ・文字相互の異体字関係の確認や、規格内字と異体字との異同判別に役立つ異体字マップを表示する「関連字表示機能」。

(2)文字化けしない文字グリフの配信

検索画面に表示される文字は、一般市民になじみの深い明朝体（平成明朝体）でデザインし、文字グリフとして、1文字1ファイルの画像形式で一般に提供します。具体的には、インターネットを經由して文字配信サーバー内の文字（GIFファイルまたはビットマップファイル）にアクセスすると、その文字が手元のコンピュータに表示されるという仕組みになっています。

この技術の基礎は、国立国語研究所のJiBOOKSプロジェクト(<http://www.kokken.go.jp/jibooks>)などによって培われたものです。

●世界規模の波及効果

このプロジェクトで得られた成果は、文字コードに関する日本工業規格の改正や、国際規格の提案に反映されます。このことは、日本の情報通信機器産業の国際競争力をより強化することにつながるだけでなく、漢字で書かれた情報資源を国際レベルで共有・活用するという文化的な側面でも、国内外に大きく貢献するものと期待されています。

（横山 詔一・笹原 宏之）

ことばQ&A

質問 私は手紙や文書のあて名はもっぱら「様」を使いますが、役所などの文書では「殿」が使われていることがあります。「様」と「殿」はどのように使い分けられているのでしょうか。

回答 「様」は、男性・女性を問わず、目上・目下に関係なく、個人に対する最も一般的な敬称として広く用いられています。手紙や文書のあて名も、「様」を用いるのが一般的です。連名の場合も、敬称はそれぞれに付けます。

「殿」については、昭和27年に国語審議会が建議した「これからの敬語」で、「公用文の「殿」も「様」に統一されることが望ましい」とされたのですが、現在でも、公用文では一般に「殿」が使われています。省庁の公文書でも、あて先の敬称には「殿」を付けています。

公用文のあて名は、機関名、部局名、役職名、個人名など、種類も多く複雑ですが、機関名でも役職名でも、あて名に付ける場合には、「〇〇市教育委員会殿」、「国立国語研究所〇〇課長殿」のように、「殿」が多数派です。

このように、公用文で「殿」が引き続き使用されている背景には、「公と私の区別が明確になる」、「官職名や役職名につけてもおかしくない」などの理由があると言われています。

ただし、昭和40・50年代から、地方公共団体の中

には、公用文でも「殿」をやめ、「様」にするところが出てきました。静岡県・神奈川県・愛知県・埼玉県・千葉県などが、文書の中の敬称を「殿」から「様」に切り替えました。

このような「様」への移行は、「殿」は上意下達式の尊大さを感じさせる、「殿」を用いると目下扱いにされた気持ちになる、「殿」では必要以上に堅苦しい、といった人々の意識がきっかけとなったようです。

そのほか、あて名には、「御中」「各位」のように、個人あてではない文書に用いられるものもあり、それぞれ次のように用いられます。

「御中」は、会社・官庁・学校など、団体・機関・組織にあてる文書で用いるあて名で、個人名を書かず、機関名や部局名だけをあて名にするときは、「御中」にほぼ統一されています。ある組織に属する人すべてを指す言い方で、組織に対する敬意を含みますが、敬称とは異なります。部課名連記の場合も、「御中」は最後に一つだけ添えます。

「各位」は、手紙の表書きとしては使いませんが、文書のあて名としては、ある組織に所属する一人一人に、個人名を省略して、同文の手紙や文書を送る場合に使います。「社員各位」「会員各位」「保護者各位」などがその例です。「各位」の「位」は「皆様方それぞれ」の意味で、「各位」も人に対する敬称なので、「各位様」「各位殿」のように、「様」や「殿」を付ける必要はありません。（井上 文子）

新刊

1 全国方言談話データベース

『日本のふるさとことば集成 一第7巻 群馬・新潟一』（国立国語研究所資料集13-7）

2003年3月／国書刊行会／冊子（A5判 横組み 292ページ）CD、CD-ROM／本体6800円

2 新「ことば」シリーズ16『ことばの地域差 一方言は今一』

2003年3月／財務省印刷局／A5判 横組み／128ページ／本体460円

「ことばビデオ」シリーズ

国立国語研究所では、平成13年度から、言葉の問題についてわかりやすく解説した「ことばビデオ」シリーズを制作しています。総合的学習や生涯学習などの素材として御活用いただければ幸いです。

<豊かな言語生活をめざして> 1

『相手を理解する一言の背景を見つめると…一』（37分／対象は高校生以上）

<豊かな言語生活をめざして> 2

『コミュニケーションの「丁寧さ」／「ほめる」というはたらきかけ』（45分／対象は中学生以上）

このビデオは販売もしております。ご希望の方は国立国語研究所管理部会計課（03-3900-3111）にお問い合わせください。

言葉以外から伝わるもの

日本人日本語教師がごく初級レベルの日本語学習者に「私は先生です」と自分を指さしながら繰り返し教えたところ、その学習者は「センセイ」というのは「鼻」のことだと思って聞いていた、などという話がある。人さし指で自分の鼻を指す動作が「自分」を意味するというのも文化が異なれば通用せず、「これは鼻だ」と言っているに過ぎないかもしれない。

異なる文化の人同士によるコミュニケーションでは、しばしば誤解が生じることがある。その際、言葉がわからないことが誤解の原因だと思いがちだが、そうとは言えないことも多い。

言語は情報伝達の重要な手段であるが、実際には言語によるものだけとは限らない。例えば、身ぶり一つをとっても文化によってその意味が異なることがある。この身ぶりなどの言語以外の手段による情報伝達では、言語によらない分、相手に与える印象を左右したり、誤解を招くことも多い。

また、日本人に対して何かを依頼したり誘ったりしたときに、受け入れられたのか、断られたのかがよくわからないという学習者の声をよく聞く。

ある学習者が日本人にスピーチを頼んだところ、「いやいや私なんか」と謙そん言葉を繰り返すばかり。日本語では時に謙そんも繰り返すことなどによって断りに使われるが、その学習者は相手の日本人が断りたがっていることがわからず頼み続けてしまい、気まずい雰囲気になってしまったという。

日本人はイエス／ノーをはっきり言わないと言われるが、意思表示をしていないのではなく、「察する」つまり言葉で明示しない場合でも、別の方法で意思を伝えているのである。

文化特有の意味が言語によらずに伝達されたり、言語の裏側に思わぬ違いが潜んでいたりすることが多い。周りに外国の人々が増え、日本語によるさまざまななかかわりが起こっている。異文化の人々との出会いでは、言葉で表されるものだけでなく、お互いの行動や思考の背景にある違いにまで思いを巡らせる余裕が必要だろう。

(小河原 義朗)

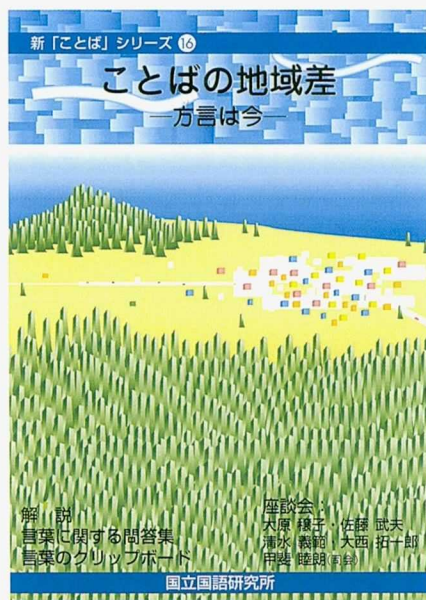
(平成14年に共同通信社より全国各紙に配信。)

※このコーナーは国立国語研究所員が書いた文章を、発行元の許可を得て転載するものです。

新「ことば」シリーズ 16 『ことばの地域差—方言は今—』

国立国語研究所編集の「新『ことば』シリーズ」の最新刊です。このシリーズ16では、共通語が広がり伝統的な方言が衰退しつつある中で、地域のことばである方言とそれをめぐる言語生活が現在どのような状況にあるのか、ということを中心に、「ことばの地域差」について様々な角度から解説を加えました。

(2003年4月／財務省印刷局／A5判 横組み／128ページ／本体460円)



座談会 「ことばの地域差—方言は今—」

大原 穰子 (女優・方言指導)
佐藤 武夫 (山形県三川町議会議員)
清水 義範 (作家)
大西 拓一郎 (国立国語研究所員)
甲斐 睦朗 (司会・国立国語研究所長)

- 解説
1. ことばの地域差—方言は今— (三井 はるみ)
 2. ことばの地域差の多様な姿 (尾崎 喜光)
 3. 変わりゆく地域のことば (陣内 正敬)
 4. 地域のことばと「ことば教育」 (日高 水穂)
 5. 方言を調べる (井上 文子)
- コラム (6編)

言葉に関する問答集 (18問) 言葉のクリップボード (2編)

※政府刊行物サービス・センター、官報販売所で販売。お近くの書店でも注文できます。

—— 第15回「ことば」フォーラムのお知らせ ——

テーマ「日本語を外から眺める」

日 時：2003年7月5日（土） 14時～16時

場 所：国立国語研究所講堂

昨年5月に刊行した新「ことば」シリーズ15「日本語を外から眺める」では、「日本語を母語としない人に日本語や日本人のコミュニケーションはどのように映るか」という観点から、わたしたちがふだんあたりまえに使っている日本語や日本人のコミュニケーションのあり方について考えました。本フォーラムでは、この新「ことば」シリーズ15の内容に関連して、次の二つのトピックをとりあげます。

- ・おわびやお礼の言い方にも言語や文化によって微妙な違いがあります。日本語を母語としない人と接する場面を例にして、日本人のコミュニケーションについて考えます。
- ・国内外における多様な日本語学習・教育の現状を紹介しながら、日本語教育の観点から日本語・日本人のコミュニケーションについて考えます。

◆発表内容の詳細と申込方法等については、6月上旬に研究所のホームページ (<http://www.kokken.go.jp>) 等でお知らせします。

◆問い合わせ先：電話：03-3900-3111（代表） 電子メール：forum@kokken.go.jp

◆今年度はこれ以外に4回の「ことば」フォーラムを予定しています。

第16回 9月27日（土），広島市（広島国際大学と共催の予定）

「話し言葉によるコミュニケーション—効果的な伝達のために—」（仮題）

第17回 11月3日（祝），富山市国際会議場（富山市教育委員会と共催の予定）

「ことばの国境（くにざかい）富山」（仮題）

第18回 11月上旬，東京国際フォーラム（「第5回図書館総合展」にて開催）《漢字に関するテーマ》

第19回 2004年1月，国立国語研究所 《内容未定》



交通機関

- ◆都営三田線「板橋本町駅」下車徒歩10分
- ◆JR埼京線「十条駅」下車徒歩20分
- ◆JR赤羽駅（西口）より国際興業バス西が丘競技場（赤羽車庫）行（バス停5番）で終点「赤羽車庫」下車1分

お知らせ

国語研究所のロゴマークが決まりました。言語の「言」の文字を使い、しなやかでみずみずしい言葉の「葉」がさわやかな風にそよいでいる様子を図案化したものです。



©2003 国立国語研究所